

黒曜石の大移動

120km離れた
伊豆・柏峠から
三芳町・上富へ



黒曜石の接合資料

黒曜石は火山の噴出物から生成された火山岩の一種で、特定の産地では採取できないことがわかっていきます（左図）。
産地により黒曜石の構成元素が異なることから、遺跡から出土した黒曜石の構成元素を理化学的に分析することにより、産地を推定することができます。



関東・中部地方の黒曜石原産地

伊豆半島の柏峠から

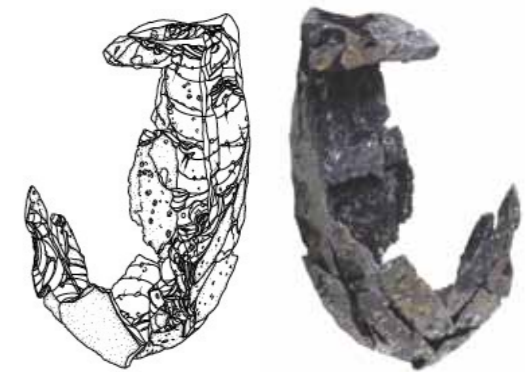
中東遺跡第2地点で発見された黒曜石製石器のうち分析可能な資料の大半は、伊豆半島の天城火山に近い柏峠から産出する黒曜石であることがわかりました。

柏峠は、三芳町・上富から120kmも離れています。伊豆半島から人々が移動してきたのか、あるいはこちらの人々が取りに行ったのか明らかではありませんが、旧石器時代の人々の行動力の大きさを実感させられます。

なお、柏峠の黒曜石は、中東遺跡から500mほど離れたサガヤマ遺跡や藤久保地区の藤久保東遺跡でも発見されています。
いずれの遺跡についても、約3万年前の一時期に集中して出土するものであり、三芳町の旧石器時代を特徴づけるものの一つと言えます。

伊豆半島から運ばれた黒曜石（接合資料）

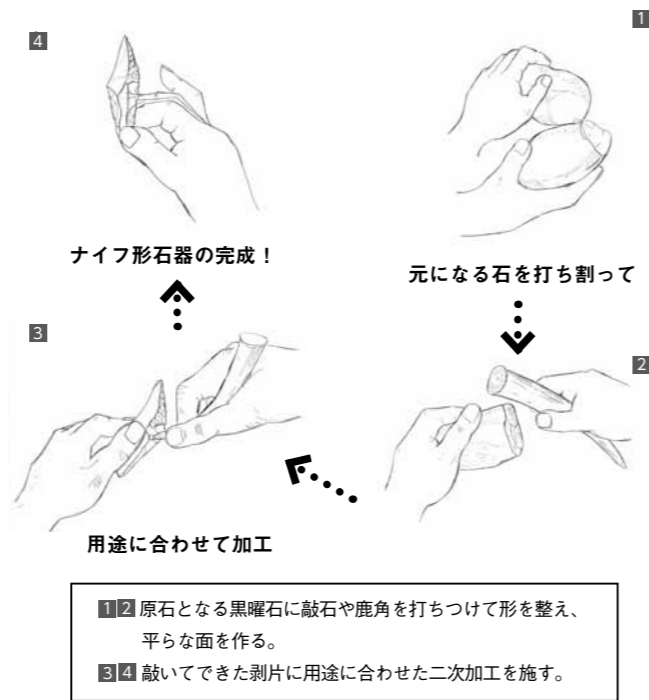
47点の剥片や碎片が接合したものの。原石は長さ13cm、幅8cm、厚さ6cmほどであったと考えられる。中央部分に接合する石器がなかったことから、ある程度まで石器を作ってからほかに持ち出したと思われる。原石から石器をつくりだす手順がわかる貴重な資料である。



原石に近い形まで接合

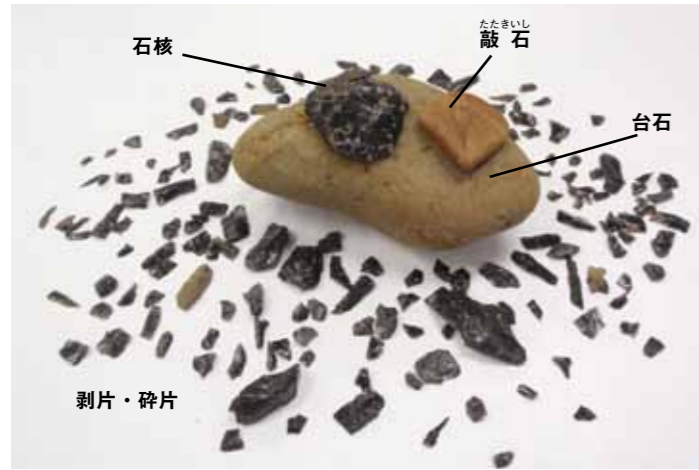
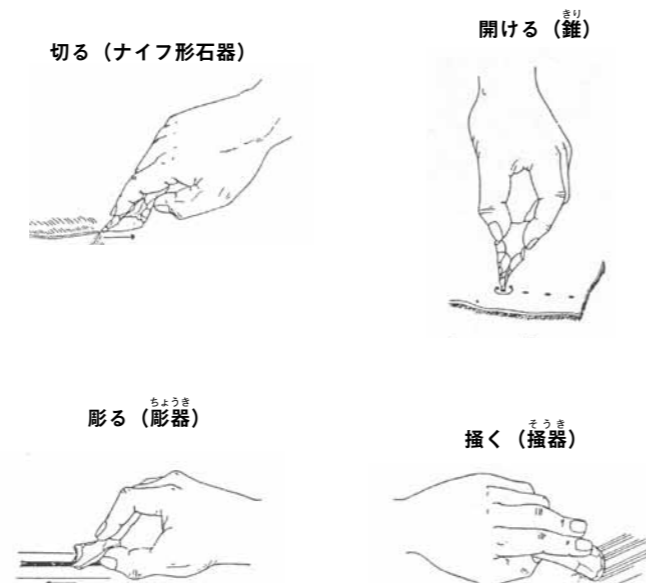
出土した石器のうち、柏峠と箱根須雲川沿いの畑宿産の接合資料は、原石の形が推定できる大きさまで復元できるものが複数ありました。
復元された接合資料からは、原石を計画的に打ち欠いてナイフ形石器を作る、約3万年前の技術力の高さをうかがい知ることができます。

計画的に無駄なくつくる 石器づくり



切る、開ける、彫る、搔く…

石器の使い方



発見された石器づくりの痕跡

中東遺跡からは、切る道具としてのナイフ形石器のほか、搔器や彫器などが出土しています。

出土した石器には、完成品として中東遺跡の地に持ち込まれたものと、石器製作によってその場で作られたものがありました。

旧石器時代の石器の一つの集中地点は、数十年単位の縄文時代の竪穴住居跡とは異なり、石器作りをしたわずかに数日の痕跡です。偶然にもその痕跡が残り、今、私たちの目の前に旧石器時代の「ある日」が広がっているのです。

時代により変化 ナイフ形石器の変遷

Ⅲ層 (約1万 6000年前)		
Ⅴ層 (約2万 4000年前)		Ⅶ層 (約2万 8000年前)
Ⅸ層 (約3万年前)		

黒曜石を使った石器として代表的なナイフ形石器。槍の先につけて狩猟具したり、肉や皮などを切る際の道具として使われた。中東遺跡では約3万～1万6000年前の各層位から出土しており、時期による大きさや形、作り方の変遷がよくわかる。